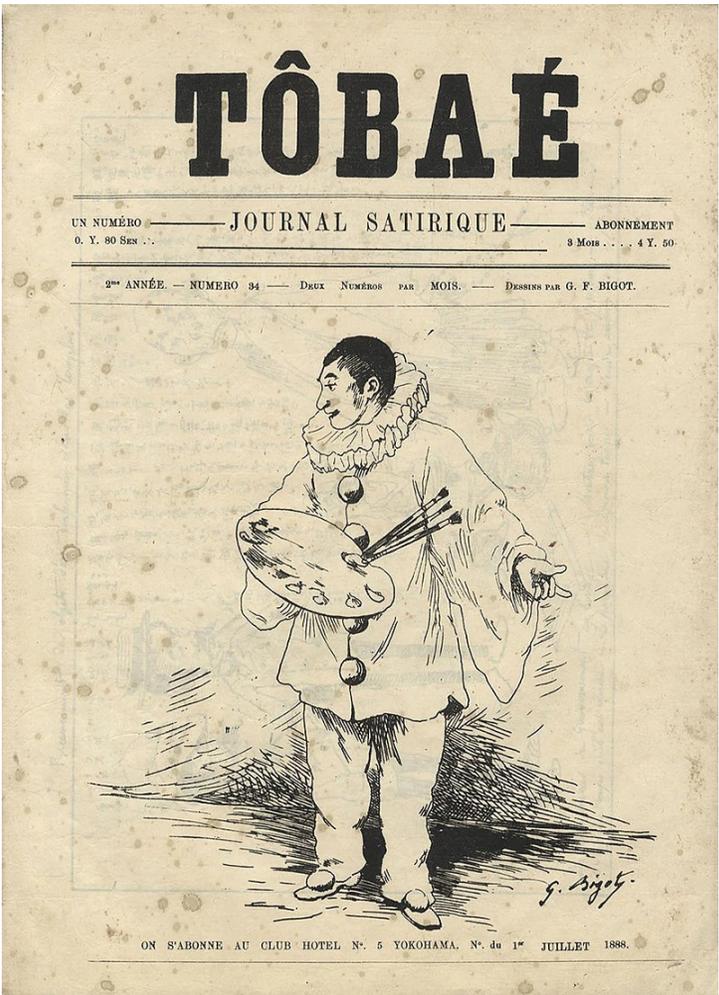


1 鳥羽絵（とばえ）

江戸時代に流行した戯画の一種。《鳥獣戯画》の筆者に擬せられる鳥羽僧正（覚猷（かくゆう））にちなんでこう呼ばれる。略画的タッチで人物や動物などを滑稽に描く。大坂の狩野派の**大岡春卜**筆といわれる《軽筆鳥羽車》三冊本（1720）は古例に属する。

鳥羽絵はまず大坂で流行し、《絵本水や空》（1780）や《絵本古鳥図賀比》（1805）の作者**松屋耳鳥斎**が代表的。江戸でも、**鋏形蕙斎**（くわがたけいさい）、**葛飾北斎**、**歌川広重**などが鳥羽絵を試みている。

ブゴー（Georges Ferdinand Bigot）は、フランス人の挿絵画家、漫画家で、1882年（明治十五年）から1899年（明治三十二年）にかけて日本に十七年間滞在し、当時の日本の世相を伝える多くの絵を残したが、1884年に刊行した『トバエ』などとあるように、当時注目をされたものであった。



長谷川光信畫

鳥羽繪筆心印

尾陽書肆

文光堂藏

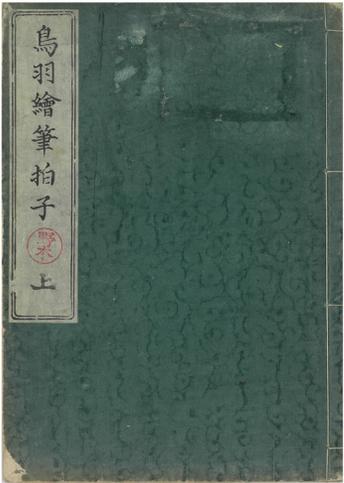
序

鳥羽小鳥羽分やてる相繪のどれもこま
作るより畫は好り中こに鳥羽繪はけん
なるはるるをびの書あるは小巻とくらし人の
知ひぬ部よりその一はありまはなる相繪
ゆゑ今にゆゑに探尋ありて古來の
本者繪ありて津神本あの物と似けしと
はよの巻にありしにのりてあやふし
知るる人よりま也

長谷川光信画



アルザス・欧州日本学研究所に所蔵される「鳥羽繪筆拍子」



鳥羽小鳥羽介とて鳥羽絵のごときおとこ有

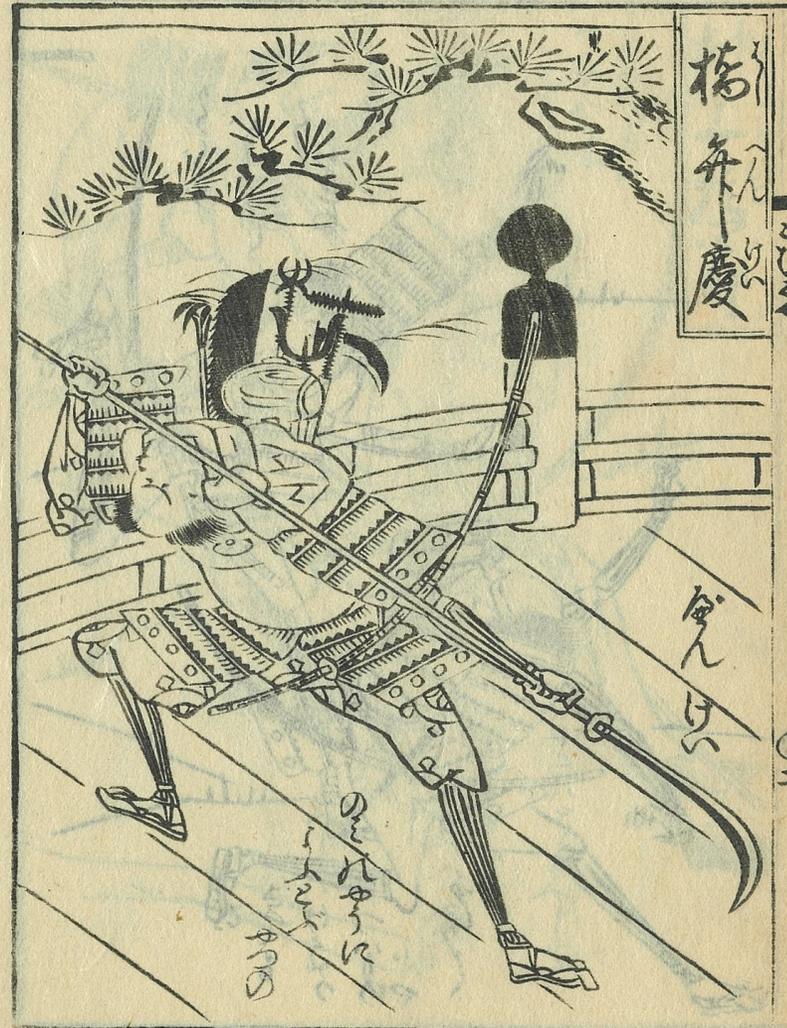
序
鳥羽小鳥羽介とて鳥羽絵のごときおとこ有
竹馬より画を好みり中に鳥羽絵のかるはづみ
なるをよろこび明暮これに筆をはしらせ人の
笑ひをひとりたのしむあり来れる鳥羽絵
ふるし今あらたに操歌舞妓并古来の
武者絵付リ三ヶの津神事の物真似此三ツを
つかね筆びやうしにのつてやるぞゑいどつと
笑ふてくんさりませ 長谷川光信画「光信」

序
鳥羽小鳥羽介とて鳥羽絵のごときおとこ有
竹馬より画を好みり中に鳥羽絵のかるはづみ
なるをよろこび明暮これに筆をはしらせ人の
笑ひをひとりたのしむあり来れる鳥羽絵
ふるし今あらたに操歌舞妓并古来の
武者絵付リ三ヶの津神事の物真似此三ツを
つかね筆びやうしにのつてやるぞゑいどつと
笑ふてくんさりませ

長谷川光信画

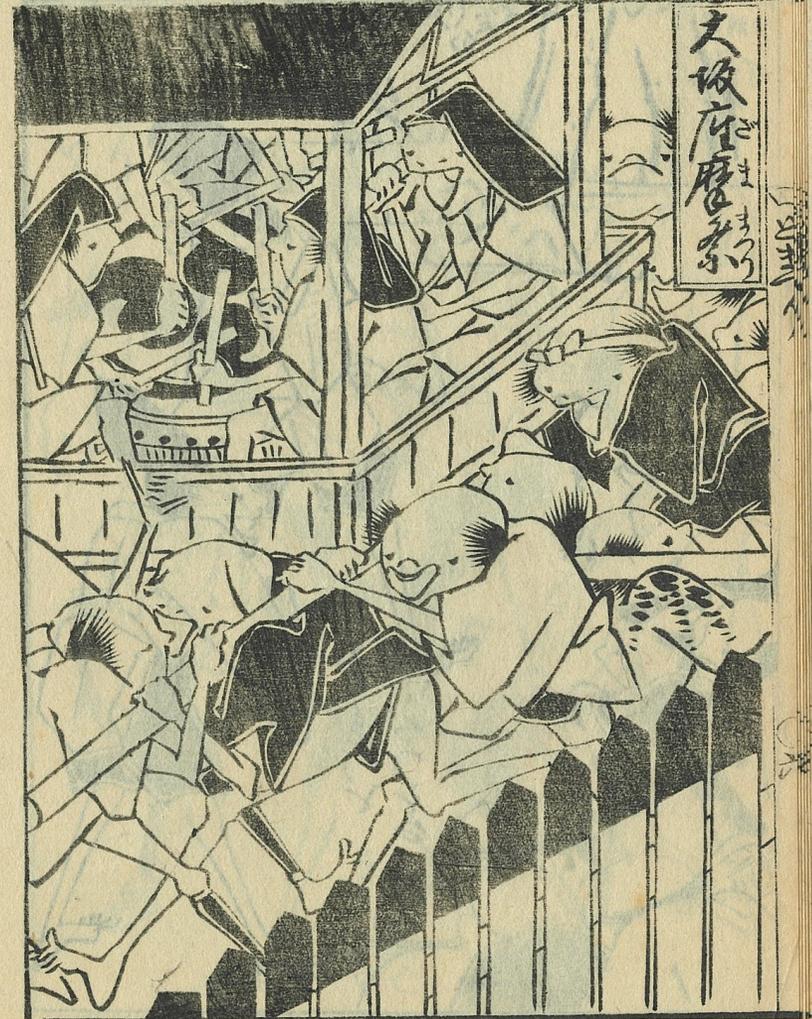
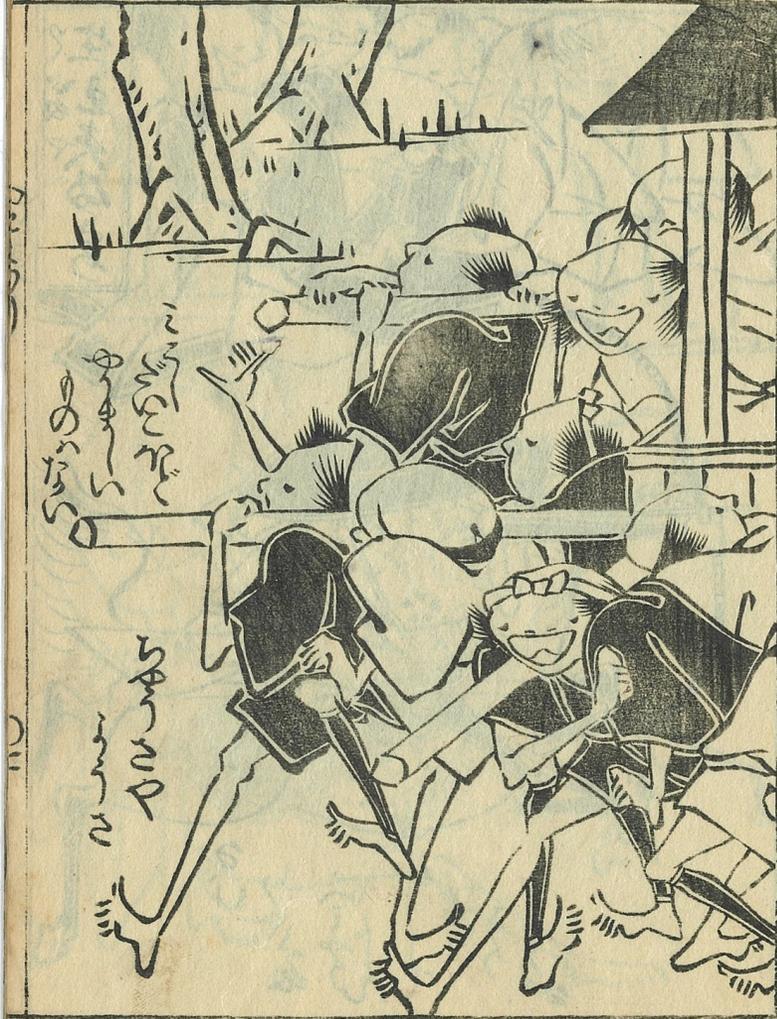


アルザス・欧州日本学研究所に所蔵される「鳥羽絵筆拍子」



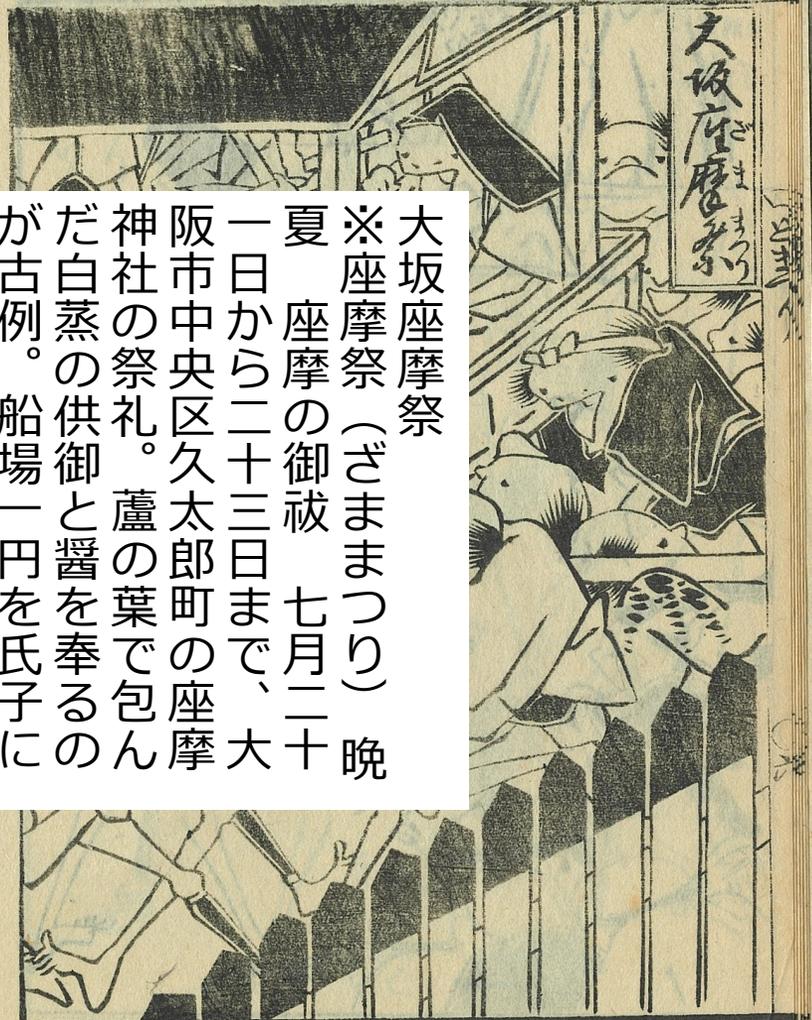


橋弁慶
べんけい
のみのやうによぶとぶや
つのも
うしわか千人ぎり
こゝじや
われは御たすけ

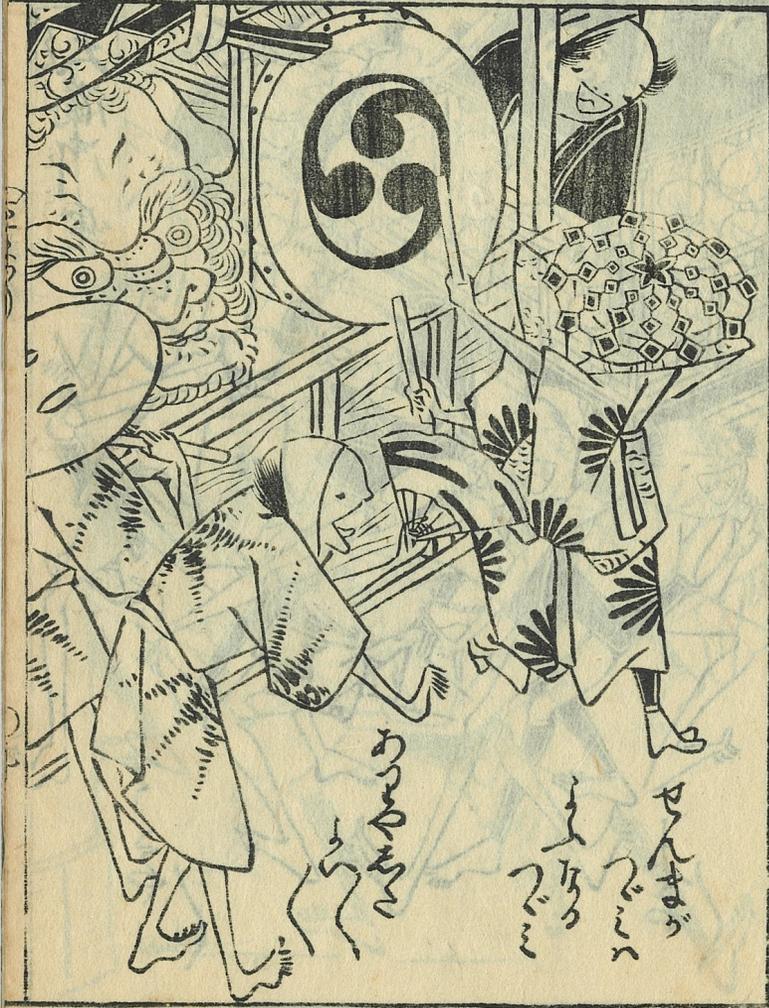


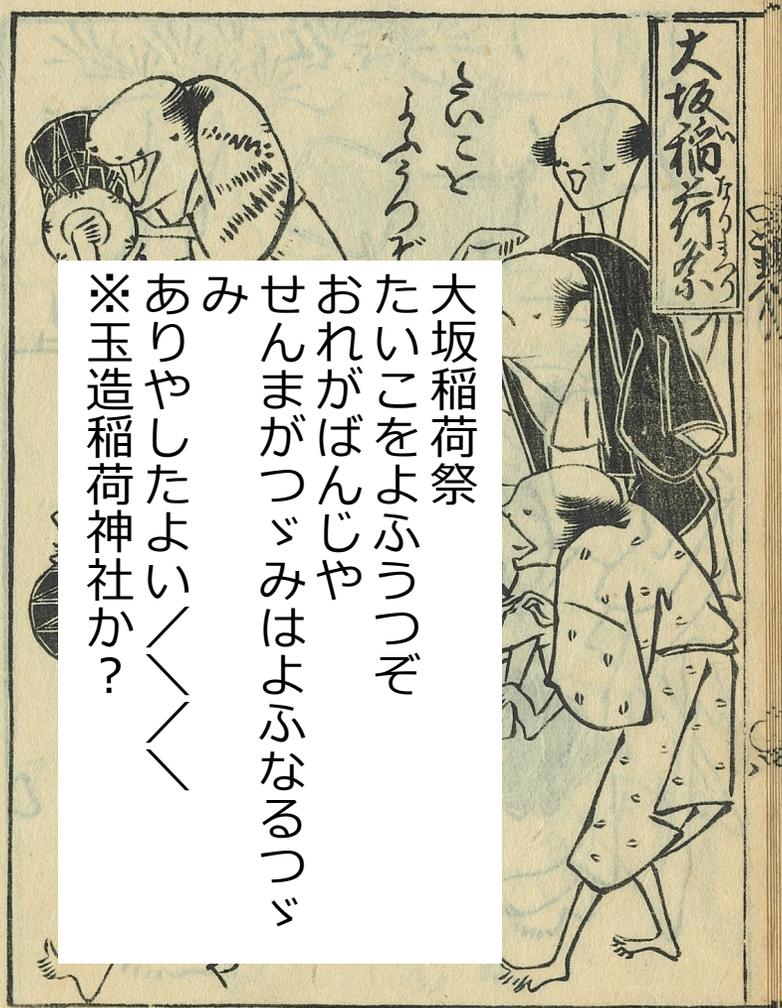
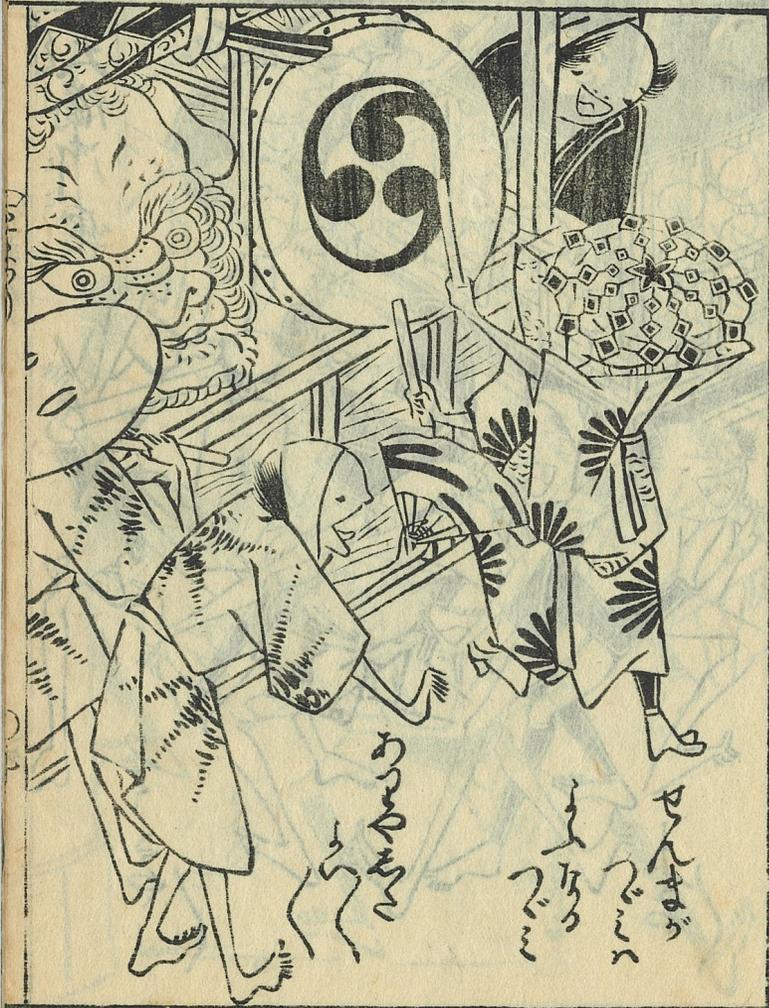


みこしだいこほどやかまし
いものはない
ちやうさやようち



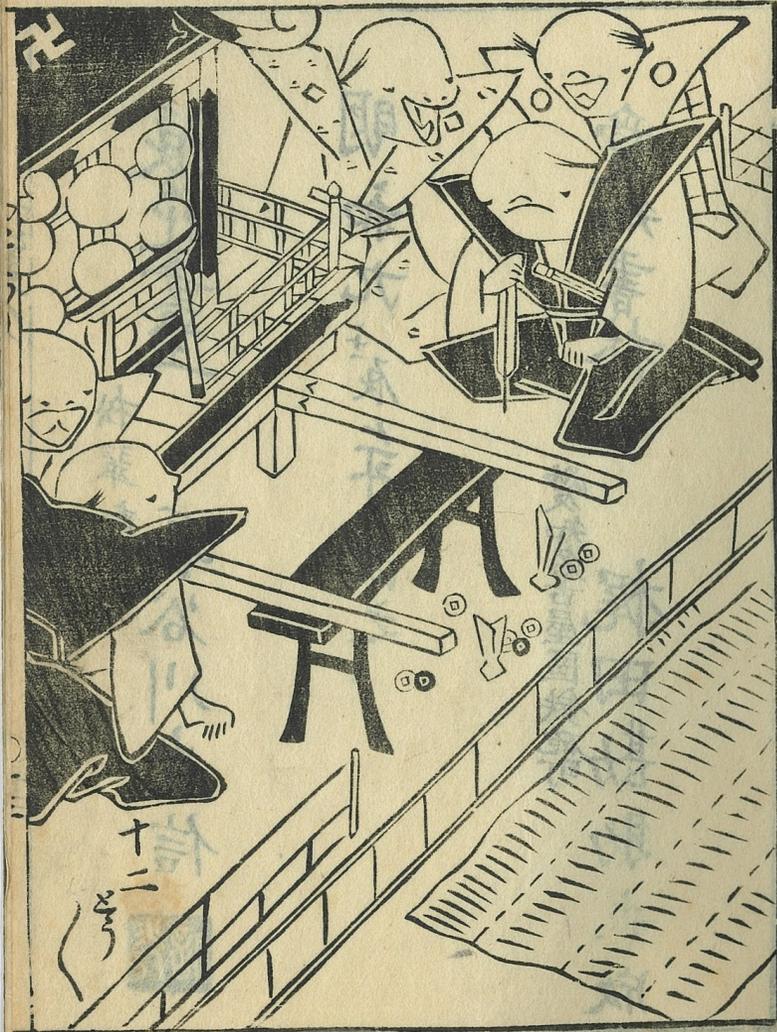
大坂座摩祭
※座摩祭（ざままつり） 晩
夏 座摩の御祓 七月二十
一日から二十三日まで、大
阪市中央区久太郎町の座摩
神社の祭礼。蘆の葉で包ん
だ白蒸の供御と醬を奉るの
が古例。船場一円を氏子に
もち、その家々は宵宮提灯
を飾る。大阪情緒ゆたかな
祭である。



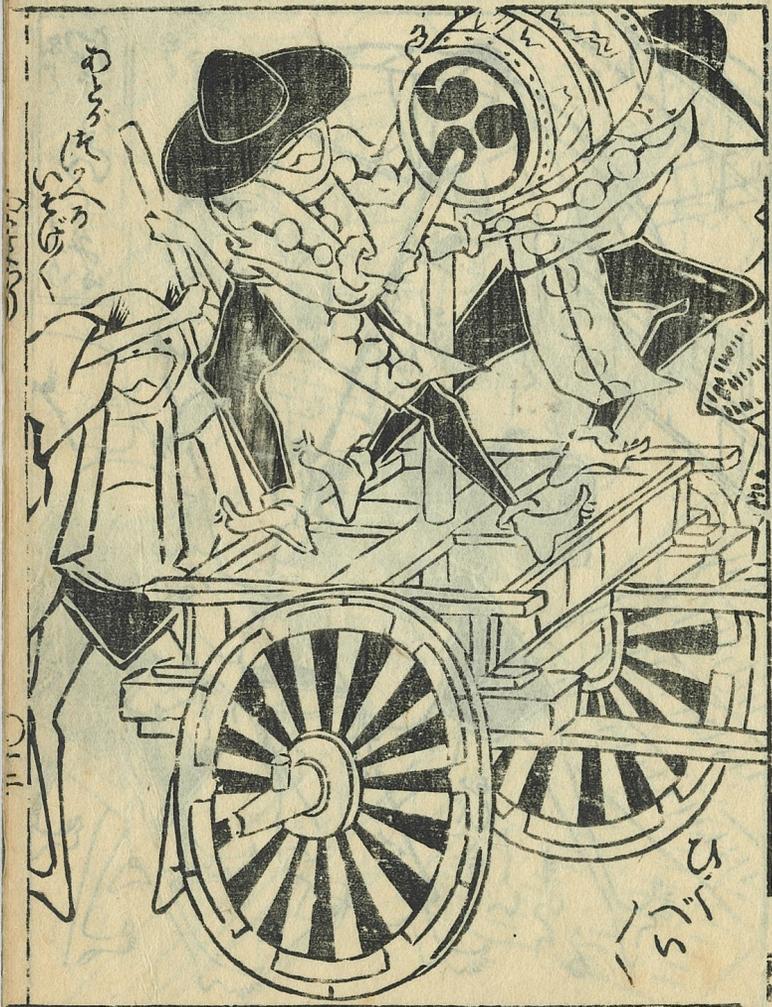


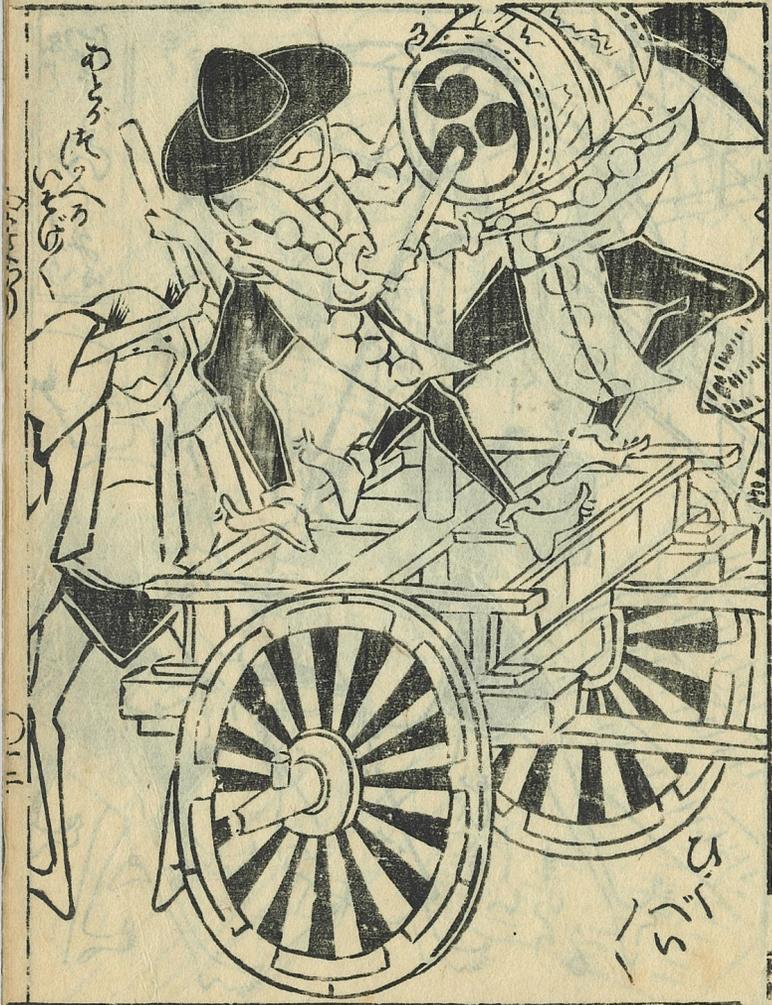
大坂稻荷祭

大坂稻荷祭
たいこをよふうつぞ
おれがばんじゃ
せんまがつゞみはよふなるつゞ
み
ありやしたよい／＼／＼
※玉造稻荷神社か？



江戸わいわい祭
と、おとしやんな
や、十二とう／＼





江戸神田祭

わかいもの／＼かけぐるをたのむべ
い
かんだまつりはがいにおびたゞしい
てれつくにはてゝてん／＼
ちからのあらんかぎりひくべい／＼
あとがつかへるいそげ／＼

鳥羽絵筆拍子（とばえふでびょうし）（Tobaefudebyoushi）

巻冊：三巻三冊

著者：長谷川／光信（Hasegawa Mitsunobu） 画

分類：絵本

成立年：享保九刊（1724） 明治摺多し

著作注記

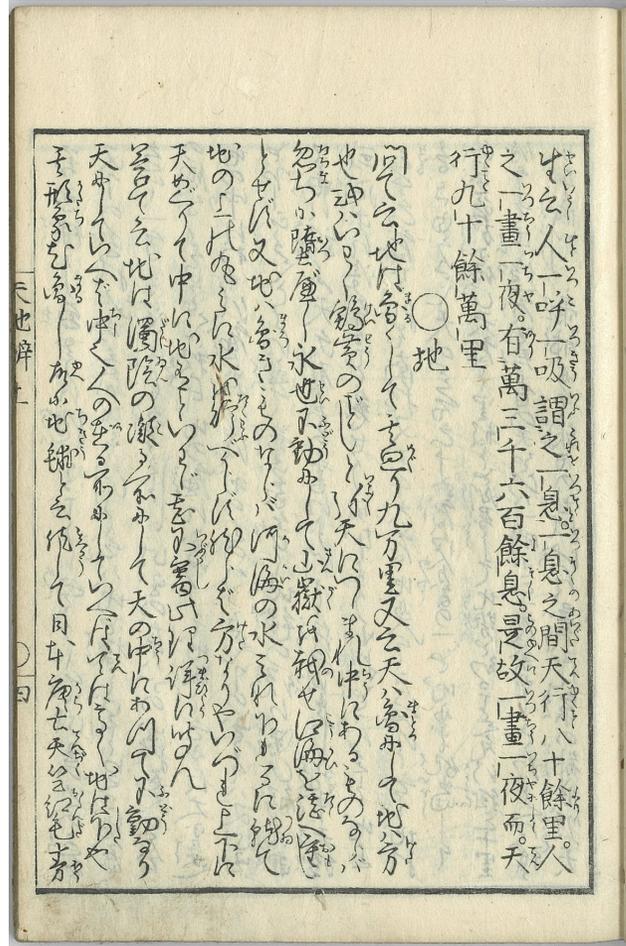
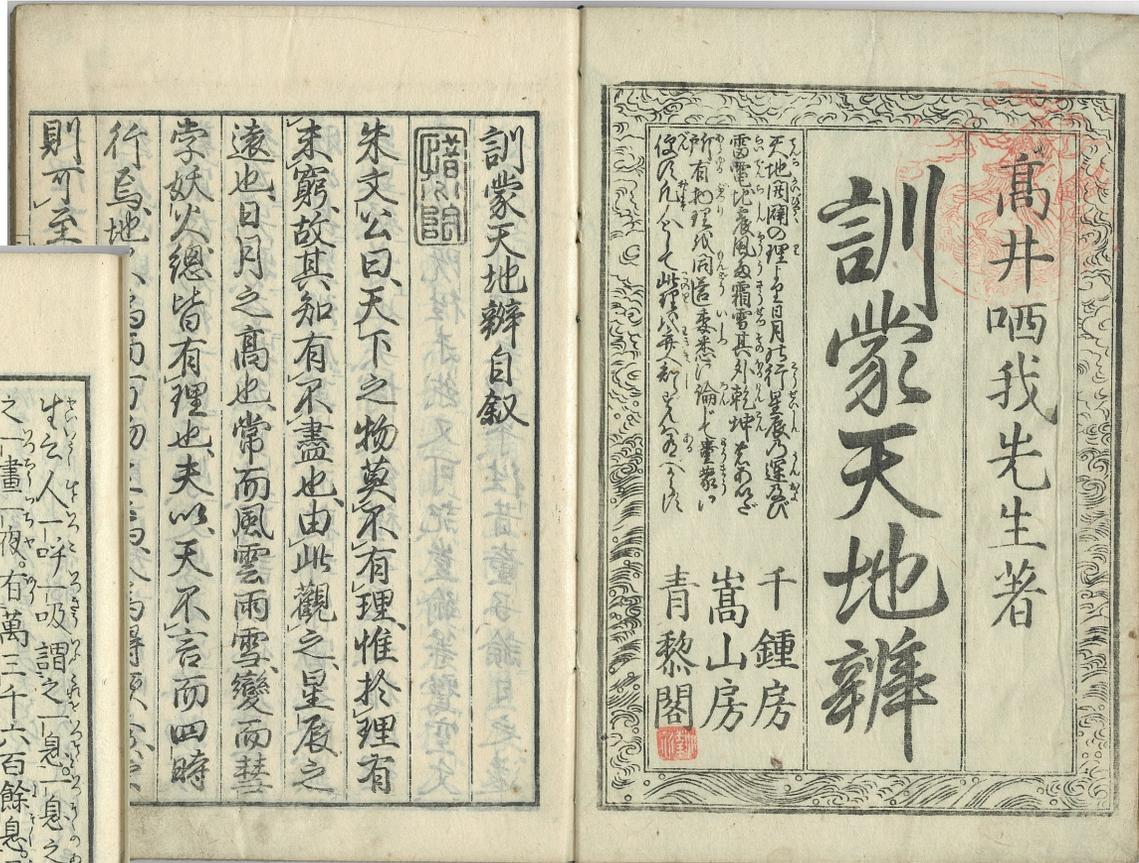
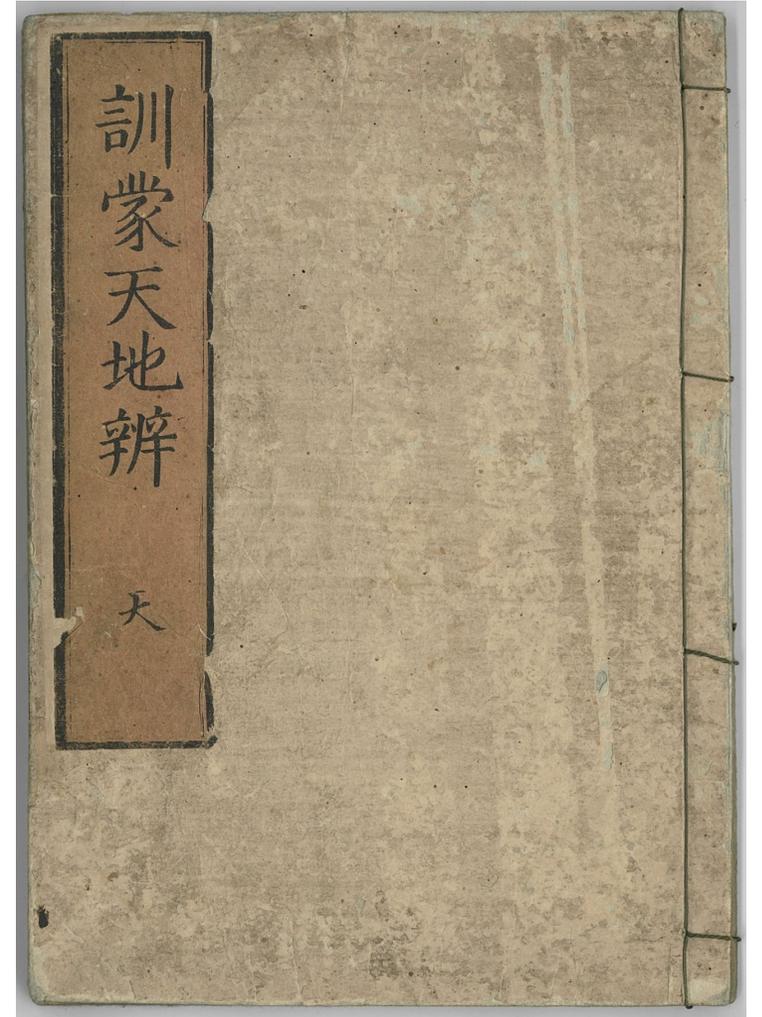
〈備〉日本古典文学大辞典に解説あり。

※開板御願書控によれば初摺は享保九年、版元は正本屋久左衛門・大津屋与右衛門

長谷川 光信（はせがわ みつ のぶ、生没年不詳）とは、江戸時代の大坂の浮世絵師。

来歴

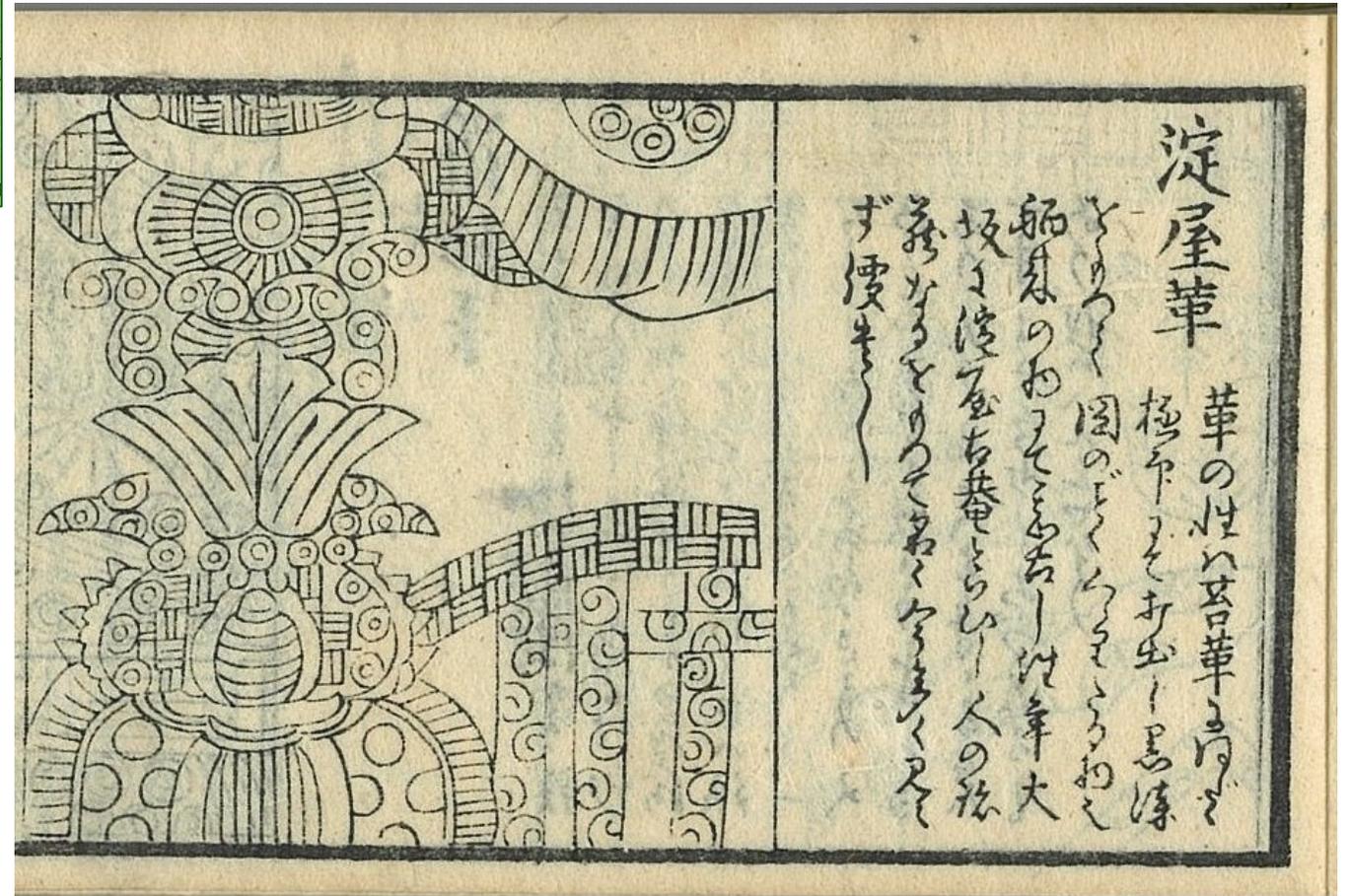
大坂の人で本名は長谷川庄蔵。柳翠軒、後に松翠軒と号す。西川祐信の画風だが、祐信の門人だったかどうかは定かではない。主に版本の挿絵を描いており、享保6年（1721年）刊行の『花王伊勢物語』に「摂陽大和画師長谷川光信」としてその名が見えるのが、現在確認できる作として最も古い



童蒙多く地球の説に迷ひ解兼て毎に疑ふ、
 天文曆家の書によつて發明すべし、就中天
 経或問等に論ずること悉せり、日本より北
 極を見ること地上三十六度なれば南極又三
 十六度、地に入て見へずと云も地の円きゆ
 え也、天の三百六十五度四分度の一を地に
 も配当して、各国各州に従ひ天度と里数と
 を測量して地勢を知ること也、凡行程三十
 里余にして星位一度を差ふ日の天を行は一
 時に三十度余にして、たとへば我が日本城
 州、帝都にて朝日の出の比は異国北京の都
 城順天府へ今の大清の都なり、などにては
 いまだ暁前也日本より東へ数里隔たる国は
 日本日の出比は昼の四つ時又は午の刻と東
 へ寄る程違ふ皆地の円なる故也猶地球に散
 在せる万国を五帯にわかち、五大州六大州
 の名は所謂**亜細亞州**、**欧羅巴州**、**利未亞州**、
北亞墨利加州、**南亞墨利加州**、**墨瓦臈尼加**
州也、日本唐天竺など皆**亜細亞州**に属すと
 云

地球六大州の略図
 此図平円に画するは山ごとを得ざれば也毬
 のごとくの円なるが地の本形也
 万国は紙面の狭きゆへ載がたし
 地はもとより円球なるゆへたとへば海に舩
 を浮べて数年を経ば終には大地を一周すべ
 し

人形手

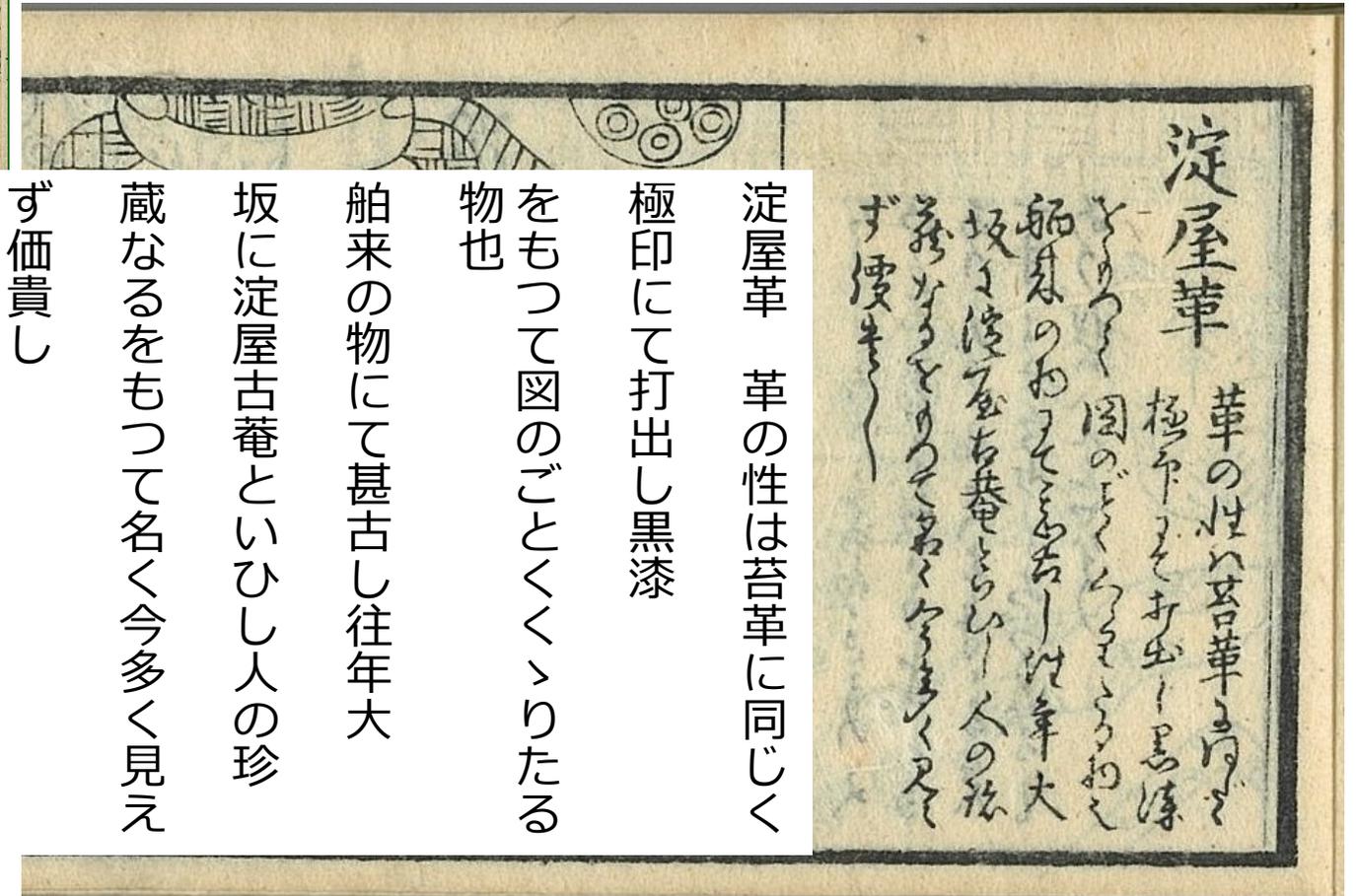
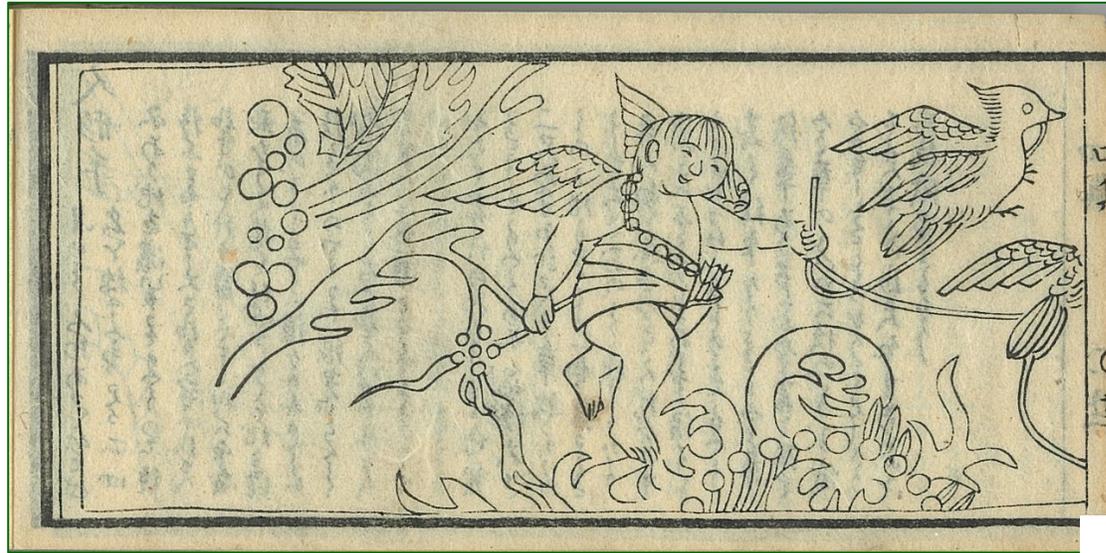


蛇手





人形手



ず価貴し

蔵なるをもつて名く今多く見え

坂に淀屋古菴といひし人の珍

舶来の物にて甚古し往年大

物也
をもつて図のごとくくゝりたる

極印にて打出し黒漆

淀屋革 革の性は苔革に同じく

淀屋革 革の性は苔革に同じく
極印にて打出し黒漆
とらふて國のどくろふさうらわ物
船倉のわらふさうらわし往年大
坂に淀屋古菴といひし人の珍
蔵なるをもつて名く今多く見え
ず価貴し

蛇手



品川屋久兵衛版 魯文戯述 芳虎画
〔三島〕

ごまのはい十吉 「どぢやくさまぎいれに、きや
つらのろようを、ごつちのぽつぽへしめ
このうさぎ、これからとんでおつはゝら
う、うまい／＼

北八 「やじさんなんだかおかしなものが
むねのところへ、さはつたぜ、ア、きび
のわるい、大へんだ／＼

弥 「アイタ、／＼、ア、いてへ／＼サア
／＼いよ／＼くひつかれた

めしもり 「おきやくさん**またじしん**でも**や
りましたか**、はやくにがしておくんなさ
い、ヨウまんざいらく／＼
おりからそのとき北八もふとんをぬけい
で、

北 「やじさんどうしだよ、はりにでもつ
ぶされたのか、しつかりしねへ、やくけ
へのおとこだ、いまいくから、エ、くや
しい、がた／＼ふるへてごしがた、ねへ、
まんざいらく／＼、ぶる／＼／＼
弥 「ア、きてへ／＼はやくきた八たすけ
てくれい、アイ／＼／＼／＼／＼

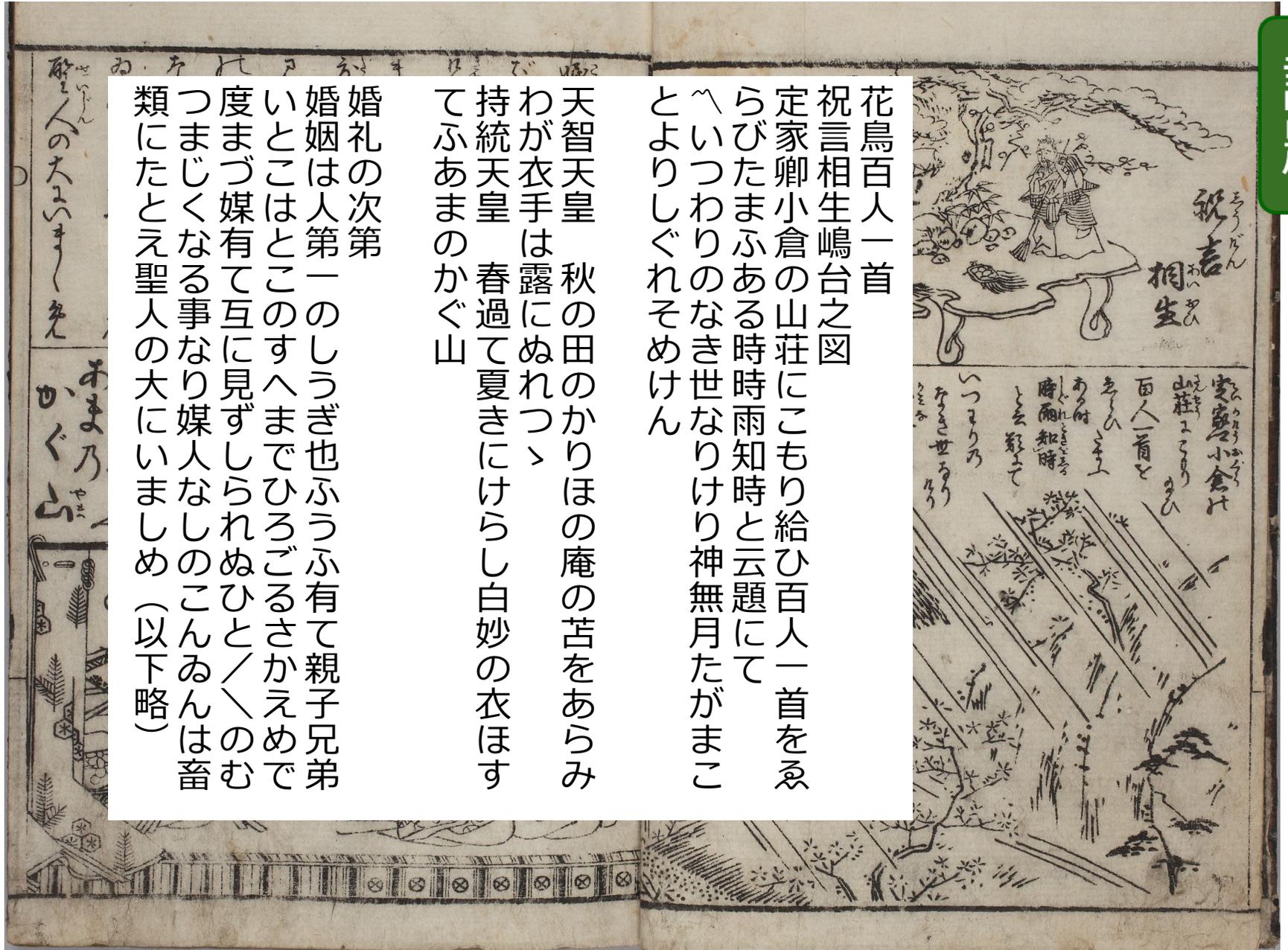
狂歌へどさくさにさいふさらつてすつほ
んとにげだすごまのはいさようなら

まんざいらく 【万歳楽】 くわばらくわばら



跡見学園女子大学／図書館
所蔵百人一首コレクション





花鳥百人一首
祝言相生嶋台之図
定家卿小倉の山荘にこもり給ひ百人一首を
らびたまふある時時雨知時と云題にて
へいつわりのなき世なりけり神無月たがまこ
とよりしぐれそめけん

天智天皇 秋の田のかりほの庵の苫をあらみ
わが衣手は露にぬれつゝ
持統天皇 春過て夏きにけらし白妙の衣ほす
てふあまのかぐ山

婚礼の次第
婚姻は人第一のしうぎ也ふうふ有て親子兄弟
いとこはとこのすへまでひろざるさかえめで
度まづ媒有て互に見ずしられぬひと／＼のむ
つまじくなる事なり媒人なしのこんゑんは畜
類にたとえ聖人の大にいましめ (以下略)



課題

教訓歌三十六首

皇太后宮大夫俊成
世乃中よ

皇太后宮大夫俊成
世の中にみちこそなけれおもひいる山の奥
にもしかぞなくなる

藤原清輔

ながらへばまた此ごろや忍ばれんうしと見
し世ぞ今はこひしき

俊恵法師

夜もすがら物おもふころは明やらで閨のひ
まさへつれなかりけり

西行法師

なげくとて月やは物をおもはするかこちが
ほなるわがなみだかな

皇太后宮大夫俊成



夜もすがら物おもふころは明やらで閨のひ
まさへつれなかりけり



なげくとて月やは物をおもはするかこちが
ほなるわがなみだかな



教訓歌三十六首

学べたゞ朝に聞き道しばのつゆはゆふべの風に
ちるとも

率爾ゆへ身を誤ると心得てたゞ何事もあつく

つゝしめ

我といふ心の鬼がつのりなばなにとて福は内に
あるべき

後といふその怠りにたをされてけふをむなしく
暮すはかなさ

身をかるく心すなをに持人はあぶなそうでもあ
ぶなげもなし

無二膏や万能膏のきどくより親孝行は何につけ
ても

大歳はつねにこそあれ勤ればいつも正月住吉の
松

人多き人の中にも人ぞなき人になれ人人になせ
人

楽といふものを求めるころこそ身を苦しむる敵
とぞいふ

無理いはずむりせぬ外はなかりけりかゝる人を
ば仁者ともいふ

苦しんで身を勤むれば腹の内はづかしからで心
あんらく

真似をせよ主人へ忠義親へ孝ひたものすればほ
んまとぞなる

怪我するは本めの見へぬ故なればはやくあけか
し本心の目を

狐よりこはさは金と色と名と大かたこれがばか
さぬはなし

ゑんに引かれて心はうつるわるい事にはまじる
まい

鳥さへも其時々をしるものをとくにしたがへ身
の程をしれ

君にのみなりて我身を忘れつ二つかふるを誠と
はいふ

